

自然体験活動における環境教育の浸透過程に関する研究

学籍番号 1012713 佐藤眞史
指導教員 市川智史教授

1. はじめに

近年の自然体験活動においては、「自然の中での活動（自然体験活動）＝環境教育」と位置づける実践例が数多く見られ、手段の目的化、手段と目的の同一視が生じているととらえられる。このことは、自然体験活動における環境教育の観点やあり方が不明確であることに起因すると考える。では、その観点やあり方とはどのようなものか。本研究では、この課題を歴史的に解明しようとした。環境教育の観点が浸透した時代にさかのぼり、活動現場、および実践者の意識への浸透過程と内容を明らかにし、観点やあり方を考察した。具体的には、次の2点を明らかにした。

自然体験活動関係者の記述に基づく、自然体験活動現場への環境教育の浸透
自然体験活動実践者への聞き取り調査による、実践者の意識への浸透

2. 自然体験活動現場への浸透過程

自然体験活動のひとつの原点である野外活動の歴史を見てみると、野外活動は戦前から青少年教育のツールとして取り扱われており、自然は利用するものであって、活動のフィールドでしかなかった。1970年以前には、自然保護や環境教育の観点の浸透は見られず、浸透以前の時期と位置付けられる。戦後から1960年代前半までに行われた活動に関する記述には自然保護、環境教育の観点は見られない。1960年代後半になり、野外活動が普及した背景からフィールドの荒廃が進み、その荒廃を防ごうとする声が出始め、活動フィールドを守ろうとする意識が芽生え始めた。

1970年代に入ると、指導者の意識に自然保護の観点の浸透が見られ始め、浸透萌芽期と位置付けられる。自然に対して無頓着であったこと、自然の中で活動していないという自己批判が現れ始め、自然は活動のフィールドから、学習の対象となった。その後さらに社会でクローズアップされていた公害や自然破壊を受けて、自然は守るべきものという意識が芽生え、自然保護の観点が浸透し始めた。しかしながら、指導者の意識変化の必要性は唱えられていたものの、実際の活動現場に具体的な形で広まるには至らず、野外活動のスタイルは従来のみであった。

1980年代に入ると、自然保護の観点が残りつつも、自然体験活動現場も環境教育を課題と捉え、より幅の広い環境教育の観点が浸透し始め、浸透初期と位置付けられる。例えば、谷川（1983）は、野外活動の中での環境教育の普及について「環境の一員であることへの理解」、「人間による利用と浪費」、「価値観の育成と環境倫理に見合った行動」の3点が重要であると述べた。また、自然は守るべきものという自然保護の観点ではなく、人間と自然の関係を学ぶこと、また価値観の変容を求めるといった新しい観点が唱えられるようになった。1980年代には、自然保護の観点と、環境教育の観点が混在してはいたものの、環境教育の浸透初期と言える状況が創出されていた。

そして、1987～1991年に行われた清里環境教育フォーラムを契機として、自然体験型環境教育という形で自然体験活動に環境教育が浸透し、1990年代に入り自然体験活動が環境教育に貢献できる方法が整理され、自然体験活動は環境教育の1分野に位置づけられた。まさしく浸透後期と位置付けられる時期であった。フォーラムの主要メンバーであった安西（1992）は、環境教育の段階的目標を第1段階「関心（親しむ、気づく）」、第2段階「理解（知る）」、第3段階「行動（実践する、守る）」と解説した上で、「どんなプログラムでも、重要なことは環境教育の最終ゴールが意識されていることであり、単なるレジャープログラムと環境教育プログラムの分かれ目もこの点にあるといえるだろう」と述べた。自然体験を入口とした環境教育の方法、観点が模索されたと考えられ、フォーラムの参加者らによって、その考え、方法論等が広められたと考えられる。

活動現場への浸透過程とその内容について図1に整理する。自然体験活動は1960年代から1990年代の間に、その活動内容や目的、位置づけに大きな変革がもたらされていた。

3. 実践者の意識への環境教育の浸透過程

1980年代から現在に至るまで、自然体験活動に関わっている指導者4人に聞き取り調査を実施した。聞き取りの結果から、1980年代半ばから後半にかけて、先駆的な人々には環境教育の観点が浸透していたこと、自然体験活動の最前線まで浸透したのは1990年代前半であり、清里環境教育フォーラムが起点であったことが明らかとなった。この結果は浸透初期、後期の状況を裏付けるものである。また、海外へ派遣された指導者らによって海外の事例等が広められたことが影響し、活動課題の整理とともに、環境教育の必要性が唱えられたことも明らかとなった。

4. まとめと考察

活動現場をリードする立場にあった人物の記述、実践者への聞き取りを分析した結果、環境教育の浸透は1970年代に萌芽が見られ、1980年代から本格的に浸透し始め、1990年代にはほぼ浸透し終えたことを明らかにした。浸透過程の分析から、自然体験活動における環境教育の観点として、自然に触れることから環境全体を考へること、人間と自然の関係を学ぶこと、価値観の変容につなげようとする、の3点を挙げるができる。

自然体験活動における環境教育のあり方については、安西(1992)、谷川(1983)を重視すべきである。すなわち、安西(1992)が示した3つの段階のうち、第3段階をねらいとし、第1、第2段階を活動内容として具体化することである。また、谷川(1983)が示した3点を活動の目標として位置づけ、環境教育の最終ゴールを意識して活動することである。

自然体験活動における環境教育には、明確なテーマ、理念、観点が重要であると考えられる。指導者自身が、環境教育活動を大きなテーマで統一し、系統だった展開を意識することが重要であろう。単に自然に親しみ、触れるだけの「感性的な認識、体験」にとどまらず、自然や環境全体を理解できる「理性的な認識、体験」までつなげられるような活動を意識すべきであると考えられる。

自然体験活動指導者が、環境教育の目的と一致する願いをもって活動を実践することは望ましいことである。しかし指導者には、自らの意識や活動の目標設定が、明確に環境教育につながるものであることが求められる。指導者はこのことを十分に理解し、「自然の中での活動＝環境教育」という安易な発想に流れるのではなく、自らが創造的態度を持つことが重要であると考えられる。

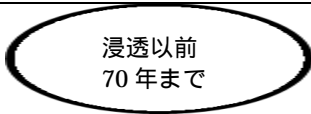
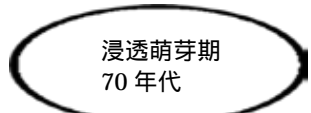
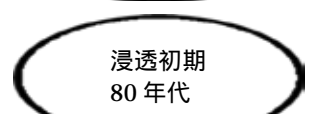
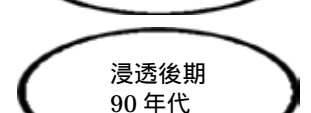
	<ul style="list-style-type: none"> ・野外活動は青少年教育のツールで、自然は活動場所ではなく、自然に触れる活動はなかった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・自然に目が向けられ、自然は守るべきものという意識が芽生え、自然保護の観点が浸透し始めた。 ・意識変化の必要性は唱えられていたが、現場に具体的な形で広まるには至らず、活動スタイルは従来のものであった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・自然保護の観点が広まりを見せ、活動現場まで広まった。 ・自然との関係の学習や価値観の変容を求めるといった観点が浸透する。しかし、自然保護の観点と、新たに見られ始めた環境教育の観点とが混在していた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・自然体験型環境教育という言葉とともに、環境教育活動が広まり、環境教育に貢献できる方法が考案され、実践者の間に広く環境教育の観点が浸透し、広まりを見せた。

図1 自然体験活動に環境教育の観点が浸透する過程

【引用文献】

安西英明, 1992, 「環境教育プログラムの目標」, 『日本型環境教育の「提案」』, 小学館, pp.8-39.
 谷川俊一, 1983, 「環境教育 - 今後の展望」, 『組織キャンプ研究紀要』, 7, 組織キャンプ研究会, pp.44-48.